

島田正治

その女性の名は阿住美穂子さん。出身は横浜市保土ヶ谷。両親は健在ということだった。アメリカ留学中に今のご主人と知りあい、そして結婚した。狭い家ですがよかったですお寄りくださいませかと誘われるままにあとにくっついて行った。教会の広場から歩いて四、五分ほどのところ、細い小道のその奥にあった。パナハチェル村は湖に面した小さな村、人口も多くないだろう。九月に子供を連れて日本へ行き、先程帰ってきたばかりという。そのうちご主人が外出先から戻ってきてあれこれ話した。観光ガイドをしていて、日本や中国、東南アジアにも行ったことがある。しかし、それもやめて、この村に三年ほど前から住みはじめた。今はインターネットでコーヒーの販売もしているとのこと。結婚式は日本の日光で挙げた。そのスタイルもみな日本式の着物、紋付き袴、たび、ぞうり。自分の両親や兄弟をアメリカから招いた。一晚、鬼怒川温泉に宿泊したと。

阿住さんが作ってくれた日本そばをごちそうになった。旅先で日本食に飢えているわたしたちにとって何よりのもの、グアテマラの山の中でそばがいただけるなどまことに夢心地でもあった。まことにありがたい。有り難いの語源はここに由来する。

三時間ばかりお邪魔してホテルへ戻ることにした。村のはずれにきて、少し疲れたのでタクシーに乗ることにし、あたりを物色していると、めざとく一人の若者がわたしたちを見つけて、手を挙げてこちらへ来るように大声で叫んでいる。タクシーというより小型トラックに近いようなものだった。即刻これに乗った。その前にねだんをきくと、まあまあのものであったから。じゃ行こうということになった。土地を知らないということがあった。ホテルまでかなり遠いと思ったのは誤りで、歩けば三丁ほどしかない。湖に沿って急坂を登りつめ、右へ曲がったところがホテルだった。目に見えてなかっただけのこと、車でわずか三分で入り口に着いた。なんだこんなに近かったのか。そう思うは後の祭、もう仕方ない。渋しぶ料金を払って降りたのである。

二泊三日のパナハチェルの滞在を了えて、ホテルチャーターのマイクロバスでグアテマラ市へ戻った。乗客はわずか四人だけで、二人は途中のアンティグアで下車したので、残すはわたしたち夫婦二人だけだったが、ちゃんとホテルの玄関まで連れていってくれた。総じてメキシコ同様、このグアテマラもホテル、バスなど観光には力を入れていて、少々料金は高くなるが、サービスはよい。

グアテマラより戻って、翌日十月十二日は、メキシコ市、日墨協会主催の秋まつりが、同協会内の敷地で行われた。長年メキシコに住んでいてもまだ一度も見たことがなかったので、参加させてもらうことにした。広い庭園内に大きなテントが張られ、中央に舞台が設けられ、まわりはたくさんの売店ができ、日本食、メキシコ料理、日本の民芸品、書籍もあり、おおぜいの人たちでにぎわった。

当日の出し物は沖縄の踊り、雅楽の演奏、少年少女の鼓笛隊などが披露された。

わたしどもも京都クラブに所属しているので、このイベントに参加、なにか趣向はないかと一考の上、手作の厚い画用紙で短冊を作ることにし、ここに毛筆で書を書くことにした。買ってくれた人にサービスにその人の名前を漢字やカタカナで書いてあげた。約百枚ほど用意したがけっこう人気があって、会が終了のころには完売となった。最近、富に日本文化への関心が高まりつつあることの証でもある。

・・・次号につづく